会話にみる認知症高齢者との「なじみの関係」の構成

○田崎 みどり

(立命館大学)

キーワード：会話, 認知症高齢者, なじみの関係

How dose conversation with elderly clients suffering from dementia make acquaintanceships?

Midori Tasaki

(Ritsumeikan University)

Key Words: conversation, elderly clients suffering from dementia, acquaintanceships

「なじみの関係」とは室伏が提示した認知症高齢者ケアの原則の一つであり、「なじみの関係」の構成によって問題行動の解消やQOLの向上、スムーズなケアの提供等の意義があるとされている(室伏,1998)。看護・介護の現場においては現在も「なじみの関係」は重視されており、認知症高齢者へアプローチする際の第一歩と捉えられている。しかし、これまで心理学領域では注目されてこなかった。地域における認知症高齢者支援への貢献が求められる現在、「なじみの関係」を心理学的な見地から検討することは有意義と考えられる。

「なじみの関係」の構成は「はじめまして」から「お久しぶりでございます」といった挨拶の変化で把握できるとされている(室伏,1998)。そこで本研究では、認知症高齢者(以下、事例)との会話の実践を用い、事例の発話に注目して「なじみの関係」の構成プロセスを検討することを目的とする。なお、「なじみの関係」とは日常語であり、室伏自身も「なじみの関係」、「なじみの良い人間関係」など、さまざまな表現を用いている(室伏,1998)。そのため、本研究ではこれらを総称する語として「なじみの関係」を用いる。

方法

事例：A(85歳・女性) 夫死去後のX-4年頃、物忘れ等が出現。独居生活困難となり長女家族と同居。X-2年に脳梗塞を発症し認知症の症状も悪化。X年時点の介護度は要介護4であり、Y医院のデイケアを週6回利用。改訂版長谷川式簡易知能検査(X年10月：6点、X+1年5月：16点、X+1年12月：11点)より、中等度以上の認知症と判断される。デイケアでは孤立化(レクリエーションに参加しない等、集団から外れること)と帰宅願望が問題とされていた。

デイケアのフィールドワークにおける会話の実践 フィールドワークにおける会話実践の記述をもとに、関係性の変化プロセスに注目して検討する。フィールドワークはX年12月～X+1年11月までY医院のデイケアにおいて実施した(計21回、時間14:00～16:30)。会話は、Aが一人の時にAの居る場で実施した。記録はフィールドワーク終了後6時間以内に作成したフィールドノーツをもとに作成し、録音等の媒体は用いていない。なお、会話内容の一部はプライバシー保護のため改変している。X年当時、発表者(以下B)は修士課程の大学院生であった。デイケア管理者は認知症を有する利用者へのリハビリテーション的な支援を求めており、Bはフィールドになじみながら利用者との援助的な会話を試みていた。なお会話の実践は、会話を続けることを第一目的とした方法で実施した(田崎,2016)。本事例の発表については、X+1年10月～11月にデイケア管理者及び長女、Aにそれぞれ説明を実施し同意を得た。なお、本研究に関する利益相反はない。

結果 Aとの全21回の会話の実践は、1期(X年12月～X+1年5

月：1～11回目)、2期(X+1年5月～8月：12～16回目)、3期(X+1年9月～11月：17～21回目)からなる。1期はBの挨拶から始まるが多かった。デイケア終了時までAのBへの認知が知らない人のままの回、Bと話した後Aより「…あなたはどうかで会ったごたるね?」「学生やったかね?」のようにBを話したことのある学生と捉え直す回が3回あった。2期では、顔を合わせた瞬間から「あら、久しぶりやったね」のように、Bを知人とみなす発話がみられた。Aからほぼ毎回Bを学生とみなした質問がなされ、AはBのことを、話をしたことのある学生と認知していることが窺われた。しかし、顔を合わせた際にはBを学生と認知していたが、会話を続ける中でBを知らない人と捉えることが1回あった。3期では、「あー、来んさった」のように、顔を合わせた時からBを知人とみなす発話が毎回みられた。デイケアスタッフがBについて「この人、誰?」とAに質問した際には、「よう来てくれらすけど、誰かは知らん」(18回目)、「お友達になってもらっとつとー」(21回目)と答えていた。

考察 AのBへの認知は大きく(a)初めて会った人、(b)話をしたことがある学生、(c)よく知っている人、の3種類に分けることができた。本事例では(b)及び(c)が「なじみの関係」であると捉えられ、2週間に1回という頻度であっても「なじみの関係」の構成は可能であり、回を重ねるにつれ、よりなじみの程度は深まる可能性があると考えられた。

室伏(1999)は挨拶の変化に注目しているが、本事例では顔を合わせた時の挨拶だけでなく、会話を続ける中でAのBへの認知が「なじみの関係」へ変化したり、顔を合わせた際には「なじみの関係」として会話が始まっていても、会話途中でAがBを知らない人と捉えることもあった。

以上より、認知症高齢者との「なじみの関係」は会話を続ける中で構成されるが、その関係性は変化する可能性があることが示された。「なじみの関係」は認知症高齢者へアプローチする際の第一歩と捉えられる傾向にあるが、最初の一歩だけでなく「なじみの関係」を維持していくためのアプローチも必要であると考えられた。

今後の課題 本研究は一事例の実践に基づくものであるが、認知症高齢者の「なじみの関係」を心理学的に検討する意義の一端を示すことができた。今後の課題としては、「なじみの関係」を構成する具体的な方法や「なじみの関係」の構成が認知症高齢者へ与える影響に関する検討があげられる。

引用文献

室伏君士(1998). 痴呆老人への対応と介護 金剛出版
田崎みどり(2016). 会話をリハビリテーションにするために
認知症高齢者との会話から 臨床心理学,16(5),571-575.